

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 25 日現在

機関番号：34513

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 年～2011 年

課題番号：20730497

研究課題名（和文） 高次の学力のスタンダード設定と学校改善システムの創出

研究課題名（英文） Designing higher-order thinking standards and standards-based school improvement system

研究代表者

石井英真（ISHII TERUMASA）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・専任講師

研究者番号：10452327

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：学力論、カリキュラム論、教育方法、教育評価

キーワード：学力モデル、高次の学力、スタンダード、アカウントビリティ、スタンダードに基づく教育改革、パフォーマンス評価、教科横断的能力、アメリカ

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、スタンダードの開発と改訂に関わるシステムと方法論を明らかにすること、特に、高次の学力を教科横断的なカテゴリーとしてスタンダード化する方法、および、そうしたスタンダードに基づく効果的かつ民主的な学校改善システムのあり方を探究することにある。具体的には、以下の3点を研究の柱に据える。

- (1) 学力論やスタンダード論に関する国内外の理論的・実践的蓄積を整理・分析することで、教科横断的な能力のスタンダード化の枠組みを構築する。
- (2) 米国を中心に諸外国におけるスタンダードに基づく学校改善システム、特に、スタンダードに向けた教育を支える教育条件の整備やアカウントビリティのシステムの実態を明らかにする。そして、多様な事例の収集・分析を通じて、効果的かつ民主的な学校改善システムを創出するための指針を構成する。
- (3) (1)(2)で得られた知見をふまえながら、日本の小中学校でのアクション・リサーチを進める。これにより、高次の学力のスタンダード化の枠組みをより実践性の高いものへと練り直すとともに、スタンダードに基づく学校改善システムを創出する。

## 2. 研究の進捗状況

研究課題(1)(2)については、スタンダードに基づくカリキュラムや学校改善システムの設計に関する米国の研究と実践の歴史、および現在の動向の調査を進めた。具体的には、アンダーソン（L. W. Anderson）らの「改訂版タキソノミー」、マルザーノ（R. J.

Marzano）らの「学習の次元」、ウィギンズ（G. Wiggins）らの「理解をもたらすカリキュラム設計」といった、教育目標設定やカリキュラム設計の枠組みに分析を加え、米国における教育目標・評価研究の到達点と課題を明らかにするとともに、「真正の学習と学力」をもたらす学校カリキュラムの構造も提起した。上記の成果については、日本教育学会等の関連学会で発表するとともに、『現代アメリカにおける学力形成論の展開 スタンダードに基づくカリキュラムの設計』（東信堂、2010年）として刊行した。

研究課題(3)については、広島大学附属東雲中学校や香川大学教育学部附属高松小・中学校などとの継続的な協働研究を進め、高次の学力のスタンダード化の枠組みやそれに基づく単元設計の方法論（「使える」レベルの学力の質をめざす「教科する」授業と「パフォーマンス評価」）を仮説的に構築した。これらのアクション・リサーチの成果については、日本カリキュラム学会、日本数学教育学会等で発表を行った。また、アクション・リサーチを通して蓄積された事例、および、開発したスタンダードの試案等を集成し、中間報告書として刊行した。

## 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

当初の計画で目的とした成果はほぼ得られており、それを著作や報告書などの形でもまとめられているから。

## 4. 今後の研究の推進方策

当初の研究計画から深化・発展させるべく、

それぞれの研究課題について、下記のような作業を行う。

研究課題(1)(2)については、国内外のスタンダード設定論の動向に関して、「真正の学習」論、「統合カリキュラム」論、「パフォーマンス評価」論など、草の根の授業改革・学校改革の展開との関連を視野に入れながら、文献研究と現地調査を進める。また、高次の学力の育成を目指す日本の先進校の調査や、戦後日本における教育実践研究の蓄積の再検討も進める。

研究課題(3)については、これまでの事例検討や国内外の動向分析をふまえて構築した、スタンダード設定とそれに基づく単元設計の枠組みを、継続的なアクション・リサーチを通じて洗練・再構成する作業を進める。作成した報告書を手引きとしながら、より多くの学校でのアクション・リサーチを進めるとともに、複数の学校間でのスタンダードの擦り合わせ(モデレーション)も行い、高次の学力を育むカリキュラム設計やカリキュラム経営の方法論を整理する。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

石井英真「アメリカの思考教授研究における情意目標論の展開 「性向」概念に焦点を当てて」『教育方法学研究』第34号、2009年、25-36頁、査読有。

石井英真「アメリカにおける教育目標論の展開 パフォーマンス評価論による行動目標論の問い直し」『カリキュラム研究』第18号、2009年、59-71頁、査読有。

石井英真「社会科における『教科する』授業の創造 加藤公明の歴史授業をめぐる論争に焦点を当てて」『科学研究費補助金若手研究(B)・高次の学力のスタンダード設定と学校改善システムの創出(研究代表者:石井英真)・研究成果中間報告書』2011年、14-26頁、査読無。

[学会発表](計7件)

石井英真・神原一之「パフォーマンス評価を教科指導にどう生かすか 中学校数学科のアクション・リサーチを通して」日本カリキュラム学会第21回大会於佐賀大学、2010年7月4日。

[図書](計13件)

石井英真「学力論議の現在 ポスト近代社会における学力の論じ方」松下佳代編『新しい能力 は教育を変えるか 学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010年、141-178頁